

特集 古代都市 ～日本人とまちづくりの原点～		Special Features Ancient cities The Japanese and the origins of town development	古代の巨大都市 Ancient megalopolises
藤原京 ～律令制都城の誕生～			
小澤 毅		OZAWA Tsuyoshi	奈良文化財研究所/遺跡・調査技術研究室長

1——はじめに

奈良盆地の南端近くには、北の耳成山^{みみなし}を頂点として、東の香具山^{かぐ}と西の畝傍山^{うねび}が三角形に並び、大和三山と呼ばれている。日本のふるさととして名高い飛鳥からみると、北西に隣接するこの地域を中心に、わが国ではそれまでに例のない壮大な都が営まれた。藤原京（694～710年）である。

ただし、藤原京の成立過程は複雑で、造営も長期間にわたっており、その建設は694年の遷都をかなりさかのぼる段階ではじまっていた。古代史上最大の内乱とい

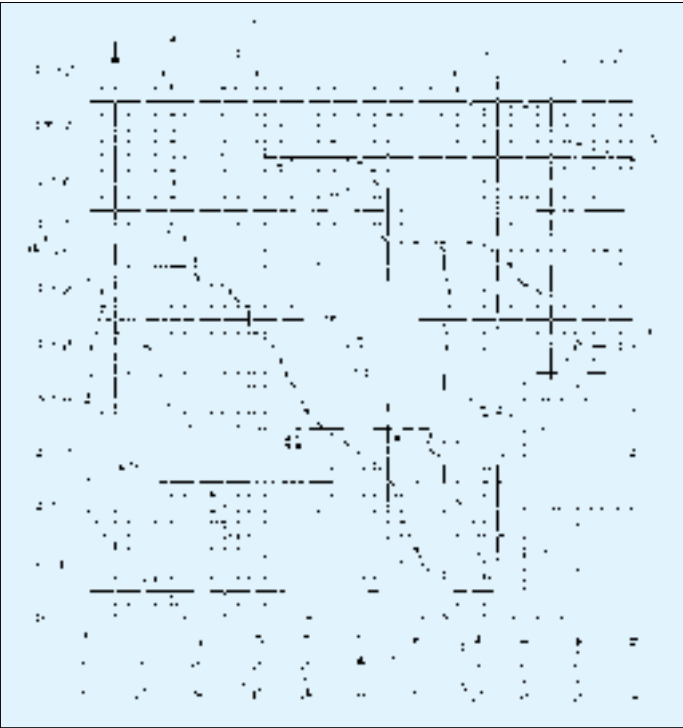
われる壬申^{じんしん}の乱（672年）に勝利を収めた天武天皇が、新しい都づくりをめざして、大がかりな土木工事を開始したのである。これが、『日本書紀』の676年（天武5年）に登場する「新城」の造営である。

一方、『万葉集』（巻19－4260、4261）にも、「赤駒の腹ばふ田居」や「水鳥のすだく水沼」をみやこ（京師、皇都）につくりかえていったようすが歌われている。また、発掘調査の成果でも、山を削り、谷を埋めて土地造成をおこなったのち、側溝を掘削して縦横に走る道路がつくられていった状況が判明している。

こうした未曾有の大工事は、当時の人々の目には、神の所業にも比すべきものと映ったらしい。先の2首はと



■写真1—上空から見た藤原京跡（格子は条坊、細かい格子は過去の復元案）



■図1—藤原京復元図



■写真2—南方から見た藤原宮跡と耳成山

もに、それらを可能にした天皇の力を、「大君は神にませば（神でいらっしゃるので）」と讃えている。

2——古代都市「藤原京」の成立

では、莫大な労力を費やして新都を建設した理由とは何だったのだろうか。

藤原京に先だって宮殿がおかれた飛鳥には、浄御原宮^{きよみはらのみや}（672～694年）や後岡本宮^{のちのおかもとのみや}（656～672年）など、天皇の宮殿を中心に、さまざまな施設が集中していた。しかし、地形的な制約から、いずれも十分な面積を確保することはかなわず、施設の配置も整ったものとはいいがたい。また、その中枢部は宮殿や寺院と関係施設の集合体であって、一部の僧尼を除き、皇族以外の人々が居住するための空間は存在しなかった。おそらく、朝廷に出仕する氏族も、多くは自身の本拠地に住み、必要に応じて宮に通うというかたちをとっていたと想像される。

これらは、律令とよばれる基本法典に基づき、全国を統治する国家体制をめざしていた当時の日本にとって、望ましいものではなかった。天皇を中心とした中央集権化を推し進めるうえでは、豪族の配下で仕事をしていた者たちを、直接天皇に仕える官僚へと転身させ、毎日役所に出勤することで俸禄を得る、というしくみに変える必要があったのである。

ただし、そのためには、宮殿から一定の範囲内に、官僚を住まわせる空間を政府が用意しなければならない。こうして、前代までとは異なり、広大な京域をもつ恒久的な都が建設されることになった。つまり、京域とは、まず第一に官僚の居住空間にはかならず、各地の氏族は本拠地を離れて京内に居住させられ、名実ともにはじめての「都市住民」が誕生するのである。

なお、彼らには位階に応じて宅地が分け与えられたが、



■図2—藤原宮復元図



■写真3—大極殿の復元

その便宜を図るために、縦横に走る道路で区画される中国風の規格的な街割りがつくられていた。これを条坊と呼ぶ。その最小単位は約133m四方で、この規格は以後の都にもほぼ踏襲されていくことになる。藤原京は、日本で最初の条坊をそなえた都城でもあった。

さらに、京の住人には、人口の1～2割に達する僧尼や、全国から召集された多くの兵士も含まれていた。彼らもまた、商工業などに従事する人々とともに、京の性格を特徴づける居住者と言える。藤原京の最大の特徴は、前代とは異なるこうした多数の都市住民と条坊の存在にあり、その都市的指標は次のように整理できよう。

- 1) 周囲の農村と視覚的に区別される集住空間として、明確な領域をもつこと
- 2) 居住者の面において、周囲の農村の住民との間に質的な差違を有すること
- 3) それらが一過性のものではなく、ある程度の恒久性をもって存在すること



■図3—朝堂院の建設

京の統治は、京職のもとに坊令、その下に坊長をおく行政組織によっておこなわれていた。一方、諸国の場合は、国一郡（評）一里という行政単位のそれぞれに、国司、郡司、里長が配される。両者はまったく別の体系をなし、全国の統治は「京」と「国」があいまって完結するものであった。「京」を特別に重視する点に、日本の律令制の特質をみることができる。

また、藤原京の成立には、当時の国際情勢も大きく関わっていた。白村江の戦い（663年）で唐・新羅の連合軍に大敗を喫した日本は、中国を規範とした国家体制の整備を急ぐとともに、その象徴的存在としての都城を建設する必要に迫られたのである。この意味でも、藤原京は社会的な分業の発展がもたらした自然発生的な都市ではない。あくまでも、国力を結集して建設された計画的都市であり、きわめて政治的な産物であった。

3——藤原京の形態とその特質

都の中心となる藤原宮は、東西約928m、南北約907mの広い面積を占めていた。そのまわりは、瓦葺の大垣で囲まれ、内部には、天皇の住まいである内裏や、政治・儀式的場である大極殿・朝堂をはじめとして、多くの建物が計画的に配置された。そして、大極殿・朝堂などの中枢部や大垣に開く門は、礎石上に建つ瓦葺の建造物となる。その柱は赤く、窓は緑色に塗られ、飾り金具が金色に輝いていたことだろう。

こうした大陸様式の建築は、以前からも仏教寺院には導入されていたが、宮殿として本格的に採用したのは藤原宮が最初である。それらは、当初から天皇の代を越えた恒久的な施設として建設され、同時に、天皇を頂点



■写真4—大型建物「東様」東半部の発掘

とする律令国家の権威を示す象徴ともなった。これらの工事に際しては、従来、個々の寺院に属していた工人集団を再編成して量的に拡大し、用材の調達から加工・組み立て、瓦や金属製品の生産にいたるまで、国家的規模の作業体制が組まれたはずである。

なお、藤原京の京域については、南北約3.2km、東西約2.1kmとする復元案が、長く通説としての位置を占めてきた。しかし、現在では、一辺が約5.3kmの正方形で、その中央に宮をおく形態であったことが明らかとなりつつある。そして、東・西・北の三方では、それぞれ京極にあたる道路遺構も確認された。この京域は、発掘調査の成果や律令の条文からみて、造営から廃都にいたるまで一貫したものと考えられる。

藤原京のこうした形態は、平城京以後の都城とは大きく異なっており、時期の近接する中国都城にも類例を見ない。その反面、中国の古典『周礼』考工記の記述と多



■写真5—貴族の邸宅の復元



■図4—市のにぎわい

くの点が一致する。『周礼』は儒学で尊重された理念法典で、古代の中国では大きな影響力をもっていた。ここでは、都城の理想型として、正方形の都城の中央に宮をおき、一辺に3つずつの門を開くこと、前面に政治の場、後方に市を設けること、南北と東西に9本ずつの道路を交差させることなどが述べられる。

藤原京の場合も、宮を中心とする正方形の京域をもち、京極を除いて縦横9本ずつの大路が通る。また、宮の周囲には各辺3つずつの門が開き、大極殿・朝堂は内裏の前面におかれていた。さらに、北面の門を通して市に行ったことを示す木簡から、宮の北方に市が存在した事実も判明している。藤原京の設計にあたって『周礼』が用いられたことは確実だろう。

もちろん、そこには、現実の中国都城についての情報不足も大きく関係していたに違いない。遣唐使の派遣が669年から702年までの長期にわたって中断し、日本はその間、新羅経由での情報はあったものの、中国からの直接情報の途絶えたなかで、律令国家の建設に邁進した。こうした状況下で建設された藤原京は、『周礼』に記されるような中国都城の理想型に基づく、理念先行型の都城としての性格をもっていたと推定されるのである。

4——藤原京の限界と平城遷都

このような成立の経緯も関係して、藤原京は当初からさまざまな問題点をかかえていた。たとえば、南東が高く北西へ向かって低くなる地形は、南面する天皇にとってふさわしいものとは言いがたい。また、宮のすぐ南は丘陵にかかるため、朱雀大路がメインストリートとしての機能を十分に果たすことはできなかったし、その規模も貧弱である。さらに、都を囲む城壁（羅城）や、都城の正

門としての羅城門も存在しなかった。

これらは、いずれもこの都がもつ根源的な問題であったが、それが明確に認識されたのは、33年ぶりに再開された遣唐使の帰国報告に接した時点であろう。702年に出発し、704年に帰国した遣唐使は、ひさびさに中国についての生の情報を持ち帰り、唐の長安城に関する最新の知見をもたらした。そこで明らかになったのは、長安城と藤原京のあまりにも大きな隔たりと、都城としての藤原京の限界であったはずだからである。

こうした情報に接した首脳部の衝撃は想像に余りあるが、それがようやく完成を迎えつつあった藤原京を捨て、新都の造営に向かわせたことは疑いない。まもなく、藤原京の欠陥を克服するかたちで、唐の長安城を指向し、国威発揚の舞台装置としての面を強調した平城京の建設が開始されることになる。そして710年、いまだ工事途中の新都へとあわただしく都は遷され、藤原京は15年あまりでその使命を終えた。それは、間違いなく古代都市一律令制都城の成立を告げるものであったが、その完成は平城京の造営を待たなければならなかったのである。

<引用・参考文献>

- 1) 小澤 毅「古代都市」『社会集団と政治組織』列島の古代史3、岩波書店、2005年
- 2) 寺崎保広「古代日本の都城と木簡」吉川弘文館、2006年
- 3) 吉川真司「七世紀宮都史研究の課題」『日本史研究』第507号、日本史研究会、2004年
- 4) 館野和己「古代都市 一宮から京へ」『日本の古代国家と城』新人物往来社、1994年
- 5) 小澤 毅「日本古代宮都構造の研究」青木書店、2003年
- 6) 岸 俊男「日本都城制総論」『都城の生態』日本の古代9、中央公論社、1987年
- 7) 岸 俊男「日本古代宮都の研究」岩波書店、1988年
- 8) 狩野 久・木下正史「飛鳥藤原の都」古代日本を発掘する1、岩波書店、1985年
- 9) 寺崎保広「藤原京の形成」日本史リブレット6、山川出版社、2003年
- 10) 木下正史「藤原京」中公新書1681、中央公論新社、2003年
- 11) 井上和人「古代都城制条里制の実証的研究」学生社、2004年

<写真提供>

写真1、2、3、4、5 奈良文化財研究所
図3、4 早川和子画